

業務実施方針／和歌山駅まち空間活性化について

和歌山駅活性化を検討するにあたって、基本構想・将来ビジョンを検討する本年度業務においては、**広域連携や広域での和歌山駅の位置づけ**といった県外・国内外との関係を踏まえたマクロ視点と和歌山市内の魅力向上・賑わいづくりにつながる市内中心市街地スケールのミクロ視点の2つの視点を持ちながら検討を進めることが重要であると認識しています。また、本業務は、発注者が3主体であることに加え、**市民含めた関係者が多く存在することや建築・土木・都市計画といった多岐に渡る分野を統合的に検討する必要があります**。さらに、基本構想段階から**設計・施工・運営管理の目線を踏まえた検討により基本構想の実現性を高めていく必要がある**と考えます。これらの点を踏まえて、下記に業務実施方針を示します。

【業務実施方針①】和歌山駅周辺を“紀州文化圏”の玄関口に

和歌山県・三重県南部等の紀州エリアは、修験道が生まれた時代から徳川御三家の御膝元であった時代を経て現代に至るまで、日本の“ほんまもん”の文化が育まれてきており“紀州文化圏”を形成していると認識しています。このエリアの北端に位置する和歌山駅は、瀬戸内海・太平洋といった海を臨みつつ、豊かな自然環境と自然崇拜に根差した宗教文化により育まれた世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」への玄関口となる場所に立地しています。この立地特性を最大限活かし、駅と観光拠点を結ぶ広域交通ネットワークの連携方策検討および関係者との対話を行います。更に、和歌山大学国際観光学研究センターのサテライトラボ等観光拠点としての駅周辺機能強化を目指した導入機能検討を行います。これらの対話や検討を通して、紺碧の太平洋歴史回廊と紀伊山地の悠久の文化遺産を巡る“聖地リゾート”の観光拠点・“紀州文化圏”の玄関口として機能する駅まち空間を目指します。

【業務実施方針②】市民まちづくり活動のプラットフォームとして機能する市内回遊拠点に

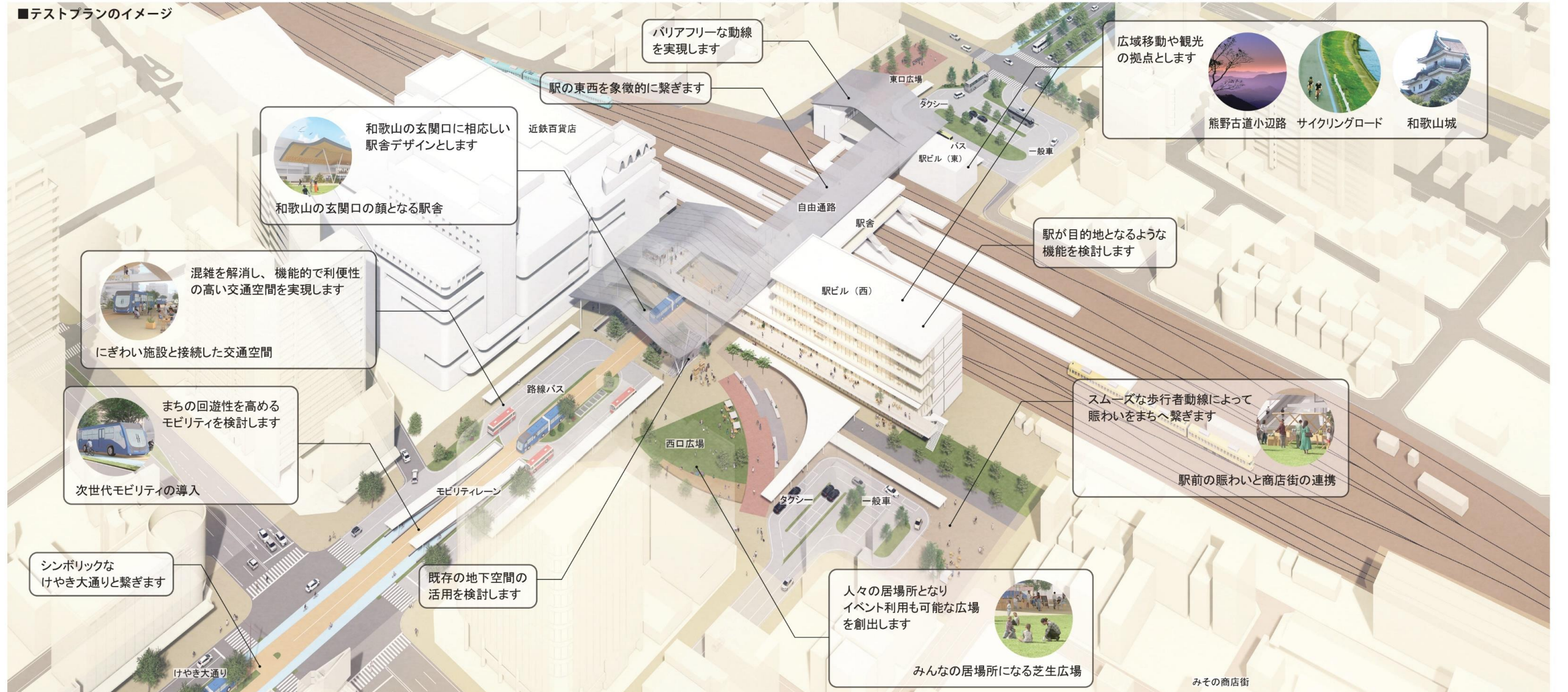
和歌山は、観光客が年間約20万人訪れる和歌山城に加え、和歌の浦、友ヶ島などの沿岸観光地など数多くの資源を有しています。更に、リノベーションまちづくりをはじめ中心市街地再生の官民連携まちづくりの取組も活発なエリアだと認識しています。一方で、これらの賑わいの芽が交通ネットワークで上手く結ばれていないという課題があると考えています。駅前再編を新しいモビリティ導入を視野に入れた市内交通ネットワーク再編の絶好のチャンスと捉え、市内交通ネットワーク再編のあり方やその中で和歌山駅の位置づけを検討し、乗換利便性が高い滞在機能を有した市内回遊拠点づくりを目指します。特に、自転車に関しては、JR西日本によるサイクルトレインの起点に位置するため、市内自転車ネットワークの検討を行い、様々なまちづくりの活動をひとつの大きな流れにし活動を促進させるまちづくりプラットフォーム機能の導入を目指します。

【業務実施方針③】多様な関係者の合意形成を円滑にするテストプランによるビジュアルベースでの合意形成

基本構想の検討は、文言ベースの検討となり易いですが、関係者で共通の目標を握っていくために、可能な限り具体的な空間像を示す平面図・3Dイメージ・模型等でテストプランを作成し、テストプランをブラッシュアップしていくことで、円滑な合意形成を図ります。

【業務実施方針④】建築・土木・都市計画・運営といった他分野の専門家によるチームアップと分野を横断する統合的検討

本業務では、駅舎・自由通路・地下施設更新（建築）、駅前広場再編（土木）、市街地再開発（都市計画）といった多くの専門分野の知見が必要となります。多くの分野の専門家で構成された検討チームを組成し、最適なプラン検討のため分野を横断した統合的検討を行います。



和歌山駅周辺の駅まち空間再編基本構想の骨格



和歌山駅周辺は、和歌山城や和歌の浦、熊野古道をはじめとする名所への玄関口であるとともに、和歌山県内、関西圏や四国などの県外への入口でもあります。和歌山駅周辺の再編を、まちなかの魅力向上と、まちと県内外・国外をつなぎとめる契機としてとらえ、ただの中継地点ではない、目的地となる和歌山駅の新しい顔づくりが重要です。現況分析・調査を通じて、和歌山の駅まち空間が持つ課題とポテンシャルを発見し、再編のための土台を整理します。和歌山駅とまちの将来像を示す基本構想では、多角的な視点での「つながり」を生み出すための5つの「くる」(結ぶ)に沿った指針を掲げ、他都市にはない個性あふれる駅まち空間の実現を検討します。

基本構想の土台となる課題・ポテンシャルの発見

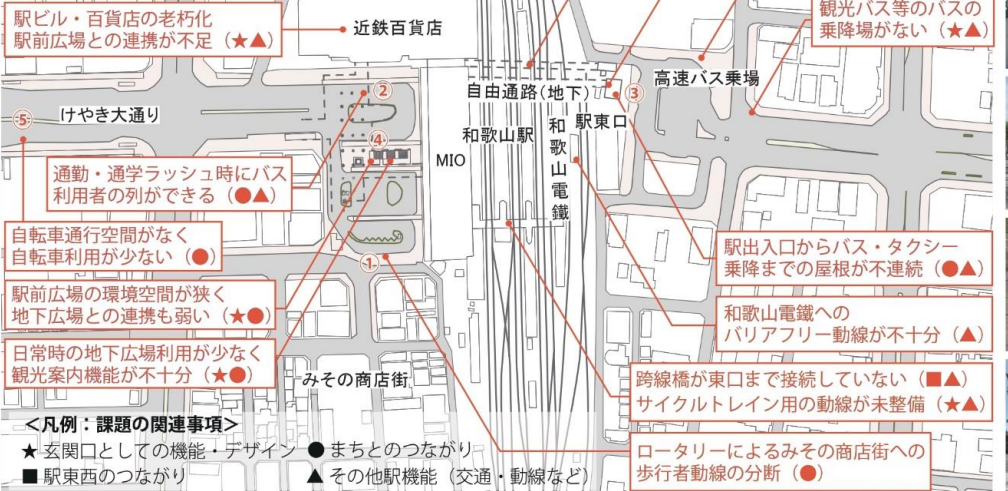
「和歌山らしさを感じる」新しい駅まち空間の実現に向け、現況分析と実態調査を通じた基本構想の土台となる課題とポテンシャルの把握を行います。業務開始後、分析・調査結果を踏まえ、提案をブラッシュアップします。



和歌山駅周辺の現状の課題と整備のポイント

駅周辺の課題を分析し、以下の整備ポイントを抽出

- 駅および駅周辺が目的地となるような機能が必要
- 玄関口としての顔づくりが必要
- 県内外の観光の起点となる整備が必要
- 広域連携を踏まえた東西駅前広場の機能分担が必要



今あるポテンシャルを活かし、次のわかやまを形づくる「5つのくる」(結ぶ)

①「まちの核」を“くる”



和歌山駅周辺エリアの拠点性を高めるためには、和歌山市駅周辺エリアと和歌山城周辺エリアの大きな2つの拠点との結びつきを強化することが大切です。既存のバス路線に加え、定時制の高い次世代モビリティ（自動運転バス、BRT/LRT等）および自転車専用道の導入により、主要な3つの核をつなぎとめ、拠点間の連携、まちなかの循環を強化します。

駅まち空間アクションプラン

- 駅前再編による乗り換え利便性の向上
- 次世代モビリティ導入を見据えた空間
- まちの回遊を促す自転車利用促進
- 分かりやすく分離された交通機能

②「まちの魅力」を“くる”



まちなかの回遊性を高めるためには、和歌山市内に点在する魅力やポテンシャルのあるエリアへの歩行者ネットワークの形成が重要です。3つの拠点移動が強化された大通りを主軸として、南北につながる路地や道路空間をウォーカブルなまちづくりを進める街路として位置づけます。徒歩圏の拡大によって更なる魅力的なまちなかを目指します。

駅まち空間アクションプラン

- 駅からまちへのシームレスな歩行者動線
- 分断された駅東西のつながりの強化
- 和歌山駅に隣接するエリアとの連携
- 魅力的なまちなかスポットへの案内

③「まちづくりの担い手」と“くる”



都市再生推進法人の指定数が国内トップである和歌山市において、点在する多様なまちづくりの担い手をつなぎとめる拠点の整備が大切です。まちの玄関口である和歌山駅に、まちづくり団体や組織のつながりを生むプラットフォーム「くるスタジオ(仮)」を整備するなど、活動や情報を可視化することで、担い手どうしのネットワークを広げること検討します。

駅まち空間アクションプラン

- まちづくりプラットフォームの構築
- イベント等の活動を支援する駅前広場
- 活動や情報の可視化・共有
- 新たな担い手創出や連携の促進

④「まちの外」と“くる”



和歌山駅は、和歌山県内への玄関口であるとともに、関西、四国圏、空港とのアクセスをもった立地的特性を有します。そうした和歌山駅のポテンシャルを活かし、市内だけでなく、市外・県外・国内外とのつながりを強化し、観光やビジネスを中心とした来街者の増大、まちの外へのアクセス性の高い和歌山駅の実現を目指します。

駅まち空間アクションプラン

- 玄関口にふさわしい象徴的な顔づくり
- 来街者を向かい入れる駅前広場
- 広域移動や観光拠点へのアクセス強化
- 観光案内機能の強化

⑤「まちの未来」と“くる”



和歌山駅まち空間の再編は、まちの未来へつなぐ整備投資のまたとない機会です。スマートポール設置による将来的に様々な用途で活用が可能なデータの取得や、自然環境の有する機能を活かしたグリーンインフラ整備、南海トラフ地震等の将来の災害に備えた拠点整備など、まちの未来へつなげる駅まち空間整備を構想します。

駅まち空間アクションプラン

- 駅中、駅前広場等のスマート化推進
- グリーンインフラ（雨庭等）の導入
- 避難所として機能する駅前広場空間
- 災害時に柔軟に対応できる防災拠点



自動運転実証実験(四日市市) 自転車通行空間の整備(松山市)



シームレスな歩行者動線(姫路市) 分断を解消する橋上駅舎(岩国市)



まちづくり拠点の整備(松山市) 模型によるまちの可視化(名古屋市)



象徴的な駅前空間の整備(長崎市) 管理事務所・案内所機能(熊本市)



スマートポールの設置(四日市市) 雨庭による雨水活用と防災(熊本市)

※事例写真は提案者実績(「自動運転実証実験(四日市)」は社会実験業務の一環として連携)